

三陸沿岸中小漁村における地域文脈

平田 隆行 (和歌山大学)

ここでは、対象として宮城県牡鹿半島から青森県南部にかけての三陸海岸沿いの中小漁業集落(注1)に対する「地域文脈の継承」の視点から見た提言を考えたい。過去の災害復興で明らかとなった問題点、漁村を考える上での注意点、三陸漁村の復興に際しての注意点について述べたい。なお、ここでは大船渡や気仙沼などの規模の大きい水産都市ではなく、200戸程度の中小漁村を対象とする。

1. 玄界島の教訓

農村計画分野における災害復興で近年問題となったのは、福岡県西方沖地震にて被災した玄界島の復興であった。玄界島では死者はでなかったものの、およそ7割の住宅が全半壊する被害(注2)があり、個別再建は困難とされ一体的整備が行われることとなった。「小規模住宅地区改良事業」によって土地建物を福岡市が買収するスクラップアンドビルドが行われ、斜面地に密集していた漁村景観は、幅員4mの前面道路をもつ住宅地へと変貌した。たしかに、未接道宅地は解消され、高齢化に対応した住まいが提供されたが、それはかつての玄界島とは違う、ただ新しい環境と言っているものであった。



写真1 撤去がおわり造成が進む玄界島(2007)

(1) 社会空間としての漁村と地域社会の持続

玄界島が失ったものは、社会空間としての漁村であり地域景観の連続性だった。岡田知子ら(文献1)(注3)によって復興前後の差異が詳細に検討されているが、震災前の玄界島は、共同井戸や住宅の庭を通りながら家々をつなぐ道など、高い共同性を示していた。しかし復興後はそういった共同性の高

い空間が継承されることはなく、個別化した住宅地が造成された。これが社会生活を断ち切ってしまうことが懸念されている。

そもそも、全国津々浦々に分布する多くの漁村はびっしりと建てづまっており、村があたかも一軒の家のようなものである。住宅のウチとソトの境界は曖昧で、生活があふれ出した路地は、通路であると同時に「付き合い空間」(文献2)でもある。このように漁村空間には漁村社会を成り立たせるコミュニケーションの仕組みが内包されており、それは重要な社会関係資本であった。漁村の復興には、これら「社会空間としての漁村」を継承することが極めて重要である。都市郊外でつくられる住宅地計画の手法をそのまま当てはめると、この社会関係資本は失われやすい。復興計画に当たっては、漁村空間の高い共同性を示す空間、パブリックとプライベートの領域性が織りなす、独特のかたちの意味を理解し、編み直すことが欠かせない。

(2) 地域景観の連続性

復興後、福岡市内の仮設住宅から玄界島に戻った人々を待っていたのは、生まれ育った「故郷」とはまったく異なる風景であった。「雁木段」と呼ばれるダイナミックな石の階段や路地は消し去られ、過去にこの場所がどこだったかという痕跡も残されず、住民のなかに蓄積されてきた土地の記憶が、日常生活の中で価値を持つことはほとんどなくなった。故郷を再生することを目指して行われた「復興」によって、帰るべき場所が失われるという事態になっていた。「復興」が、震災以前の生活を取り戻すことにあるのだとすれば、地域景観が根こそぎ変わってしまう復興計画には矛盾がある。既に記した「社会空間としての漁村」の継承と合わせ、地域の安全性を向上させつつも、過去の村落空間との連続性を持たせた計画の重要性が、玄界島の復興から明らかになっている。

2. 生業と生活が一体化した漁村をどのように考えるか

漁村の特色として、生活と生産の空間が一体化している点がある。路地は必ず漁港に通じており、生産施設であるはずの漁港は、閉ざされることなく誰に対してもオープンに開かれていた。このように漁港は人々が集う交流の場であり、中心的な広場としての役割を担っていた。生産拠点でありながら、憩いの場所であり、祭礼が行われる神聖な場所でもあつ

た。一方、漁船や漁法、水産加工を含めた漁業技術の進展によって漁業の形態は大きく変わってきた。漁業形態の変化に合わせて漁港も姿を変え、漁村空間も変化していく。しかし漁村が漁業と一体化した生活空間であるという点は一貫して変わらなかった。今回の津波被害からの復興では、この漁村の統合性という地域文脈をどのように継承するかがポイントとなる。



写真2 漁港で祭礼を行なう(紀伊大島 2003)

(1) 集落移転・高所移転

2011年度建築学会大会農村計画部門研究懇談会「漁村集落再生のシナリオ」(文献6)において富田宏は、「漁師は鰓(えら)呼吸している」と語った。自然を相手として生きている漁師は、刻々と変化する海象を体で嗅ぎ取り、臨機応変に対応して生きている。「漁師は、海を睨み、常に海を見られる場所に住みたいし、海と漁に関わり、生きていきたいと思っている。」のだという。海、あるいは漁港から漁村を切り離すことが漁師にとって何を意味しているかを集約した言葉である。しかし、富田は同時に漁師も一枚岩ではなく、時間的経済的余裕があるわけではない、ともいう。結論ありきではなく、まずは漁師たちの話を聞くことから始めるべきであるという。居住地と漁港、あるいは海との関係は、必ずしも近接している必要はない。富田のいう「海を睨む」(文献3)というコンセプトで海との関係を持ち続ける計画技術は可能であるし、また地井昭夫が「来訪神型空間」(文献2)とよぶ「海に住む神を空間的にも迎えやすいかたち」をとることも可能であろう。

同研究懇談会において、重村力は高所移転についてさらに詳しく言及している。(文献4)高所移転(高地移転)は明治三陸津波から計画的に行われてきたが、今回の震災では特に「高台移転」という言葉が使われていることに重村は注意を促している。「高台移転」はやや大規模な開発で、現居住地から離れた遠方の台地への集団移住をイメージさせる。一方「高所移転」は細かく小地形を読んでスポット的に高所に住まいを移すニュアンスがあるという。(注4)

三陸の中小漁村の場合、陸前高田や大槌市街地のように居住域の大半が破壊されるような大規模な被害は少ない。漁港にほど近いエリアは浸水しているものの、ある程度の住宅はもともと小高い場所に建てられており、浸水を免れたものが多く存在する。微細な高所移転地は周囲に点在しており、さらにもともと住宅数の減少が予測されている。故に大規模な宅地造成を行わなくとも、小規模な移転先を見つけることは不可能ではない。地形改変は最小限に留め、過去の災害の履歴を読み解きながら、まずは適切な土地利用と居住地選択をすることで安全性の確保を目指すべきである。そうすることで、漁村集落の社会資本を引き継ぎ、また地域景観の連続性を確保することにもつながりやすい。

(2) 漁港の再編と集約化

復興の争点のひとつに、漁港の再編と集約化がある。仮に漁港再編が行われるのであれば、生産と生活が一体化している漁村に与える影響は非常に大きい。漁村は厳しく配置された漁業権と対となって成立しているなど、農山村と比較しても非常にデリケートな問題を孕んでおり、安易な議論がなされるべきではない(文献3)。しかし復興に向けられるリソースは限られており、漁業従事者の高齢化など極度に縮小傾向のあった漁港が自主的に再編を選ぶ可能性は残される。その時、どのように地域文脈を残していくか、が問題となる。漁村は既に述べたように、漁港と一体化していることが重要である。生産施設としての漁港が機能しないとしても、集落のコアとして港が存在感を持ち続けることが望ましいと考えられる。



写真3 拠点漁港から外れた気仙沼小鯖集落(2011)
漁港周辺の建物は破壊されているが、高所の住宅は残る



写真4 岩手県普代町大田名部のパノラマ(2011年4月)
漁港部分の被害は大きいが居住エリアは無被害

(2) 防潮堤とハマのデザイン

高所移転であれ、漁港再編であれ、津波浸水エリアを今後どのように計画するかが、大きく問われてくる。市街地では主に水産施設、公園、生産緑地とする案が出されているが、中小漁村でのハマ空間の整備方針はほとんど白紙の状態である。このハマ空間の性格を決定づけるのは、安全を確保するための防潮堤の存在であろう。

防潮堤は漁港エリアと居住地エリアを分断するかたちとなりやすく、今回の津波の高さに合わせて、その高さは10mから20mと、とても巨大なものとなることが予想される。平面的に漁港との一体感をなくすだけでなく、断面的にも日照通風の面でも問題を抱えることがあるからである。岩手県普代村、大田名部集落は、明治・昭和三陸津波で壊滅的な被害を受けた集落である。その教訓から高さ15.5mの防潮堤が居住エリアと漁港との間に設けられていたため、今回の震災では防潮堤の内側は無被害であった。ただ、太田名部集落が過去の地域文脈を継承しているかと言えば、難しい。堤は比較的緩やかな勾配であったため、生活環境もさほど悪化してはいなかったが、集落から海は望めず、歴史性やいわゆる漁村らしさには乏しい。安全性という意味では非常に高い評価が出来るが、漁村空間の統合的な評価という面でベストとは言えなかった。今回、防潮堤への提言をさせてもらえば、安全性を第一とすることは当然であるが、漁港と居住地を遮断する「壁」として構築するのはできるだけ避けることを提案したい。そうではなく、防潮堤を浦（ウラ）と村（ムラ）とのハザマに造られた、バッファとしてデザインすることが望まれる。それはいわゆるハマ空間であり、漁村に住まう人々が海に對峙し、共生し、憩い集まる場所となるべき場所である。今回の浸水エリアをオープンスペースとして考えるのであれば、防潮堤を含めそのようなハマ空間の創造に繋げたい。これには先例がないわけではない。

三陸と同じように津波常襲地である和歌山の広村堤防は、安政南海地震(1854年)後に濱口梧陵らによって造られたが、



写真5 広村堤防(和歌山県有田郡広川町)
「稲むらの火」で有名な濱口梧陵らによる

その緑豊かな堤防は美しい海岸線の風景をつくり、背後の伝統的な町並みと調和している。津波を怖れるあまり強固に構えるのではなく、備えつつ、良い村とすることは決して不可能ではない。

3. 三陸漁村の多様性と歴史性

漁村は多様である。漁村は漁業を基盤にし、また漁業は海洋の資源再生力に依存している。海洋の資源再生力は有限であり、それを最大限に活かす最適化を長年にわたって行ってきたのが漁村である。三陸リアス沿岸では複雑な地形にあわせて集落のかたちは様々であり、また漁業形態も多様で、アワビ・ウニなどの採取、定置網(秋サケ)、養殖(ワカメ・ホタテ・ホヤなど)、漁船漁業などが組み合わせられ、漁業にあわせた集落の形態ができていく。多様な地形に多様な漁業が営まれ、漁村それぞれに特徴があり、固有性がある。だから、地域文脈も漁村それぞれに異なり、復興計画もそれぞれに異なってくる。まずは三陸漁村の多様性を念頭に置き、一様な計画を避け、集落ひとつひとつを丹念に見ていくことが重要となる。

(1) 震災前の風景とは明治三陸津波以前

三陸の漁村集落の地域文脈とはなにかを考えると、いまあるもの、震災前にあったものの継承だけを考えていては不十分である。三陸は津波の常襲地であり、近年も明治三陸津波、昭和三陸津波、チリ地震津波によって3度も洗い流されてきた土地である。特に明治三陸津波(1896年)では今回同様壊滅的な被害を受け、高地移転も行われるなど現在につながる近代的な津波対策がとられはじめた時代であった。三陸が歴史的に持っていた地域文脈は、この明治三陸津波のときに失われ、継承されなかったものも多いだろう。平成17年度に水産庁が行った「未来に残したい歴史的文化的財百選」を見ても、岩手・宮城両県のもは、田老の防潮堤などの津波伝承施設や、作業小屋である「番屋」が選定されており、それ以前から続く歴史的環境は少ない。また、住民自体が、明治あるいは昭和津波以前の本来の姿を知らない可能性が高い。このことは三陸の漁村集落に豊かな環境が形成されていなかったのではないかと誤解を生じさせかねない。また「本来



写真5 明治末期の馬市の様子(気仙沼市津谷)

の豊かな環境」がどのような環境であったのかを基準に「復興」は考えられるものだが、その基準を低く見積もってしまう可能性がある。写真は明治末期の津谷の馬市の写真であるが、現在の三陸沿岸の風景からは想像できない力強い町並みを有していたことがわかる。地域文脈を考えると、災害以前の風景を考えると、昭和、あるいは明治の津波以前の暮らしからの継承を考える必要が、特に三陸の特徴として挙げられる。(注5)

(2) 災害・あるいは災害文化という地域文脈

2011年度建築学会大会農村計画部門研究懇談会「漁村集落再生のシナリオ」では、農村計画委員長の三橋伸夫から、浸水したという事象を地域資源として捉えられるのではないかという提案がなされた。われわれは、津波被害を否定的に捉え、あつてはならないもの、消し去るべきものと捉えがちである。高台移転して「撤退」したり、強固な防潮堤によって追いやりしがちである。そうではなく、この被災を記憶させ、活用できるようなむらづくりが可能なのではないか、という発言であった。和歌山県串本町大島の檜野集落は、江戸初期の津波によって高台に移転した集落である。移転してから400年が経っているが、原地は未だ集落のかたちが残こり、神社もそのまま、そこでは現在でもなお祭事が行われている。原地は山林にならず、管理された畑地として管理されており、当時の石垣もそのまま残され、かつて集落があったことがはっきりと認識できる土地利用となっている。漁港は原地にあるにもかかわらず、そこに家屋を建てることはせず、400年間原地復帰なしで移転を成功させてきた。檜野集落(注6)には、災害を受けとめ災害と共生する文化、また景観の連続性など示唆が含まれていると感じる。今回の災害で、地域文脈としてまちづくり・むらづくりに取り入れていなければならないもののひとつに、津波という地域文脈があることは間違いない。現在、津波の爪痕は極めて大きく残っている。これから、何を残し、どのように顕彰し、なにを変えていくのか、その取捨選択が必要となっていく。その土地で何が起こったのか、災害の経験と災害と共生する知恵を、地域文脈として残していくことが重要であろう。どの集落でも、ハマからほど近い高台に立地する神社が津波の停止線と重なり、またその石段が極めて重要な避難路となったことを覚えておきたい。

4. まとめにかえて プランナーに求められていること

長年に渡って漁村計画に取り組んできた富田は、漁村が多様であり、一律な復興計画がそぐわないことを強調している。そのため、地域に寄り添う専門家の必要性を述べている。また同時に、漁村が自然・生業・生活が一体となった「完結した環境的小宇宙」であるがゆえに、統合と理解が必要だと述べている。私たちプランナーに求められているのは、まず漁

師たちの話を聞くことである。住民の話を聞き、地域の来歴を掘り起こし、安全性を担保しながら、それを統合しカタチを示すこと、だろう。またそのカタチを住民にフィードバックしながら行動を共にすることだろう。地域文脈として、過去から未来へと引き継がなければならない空間としては、まず社会空間としての漁村が、そして風景の連続性が、さらに災害の記憶が挙げられる。また、特に留意しておかなければならないこととして、漁村が極めて多様であり、一体的・統合的な環境であることである。だから仮に移転や漁港再編、あるいは防潮堤の建設が行なわれたとしても、その文脈を引き継ぐことの出来る計画であることが望まれる。くりかえすが、漁村は、自然と生業と生活が健全な関係性をもって成立してきた。漁村における継承すべき地域文脈とは、その健全な関係性を今後も維持するうえで不可欠なものに他ならない。それを「発見」することと、再び統合することが求められているのである。

参考文献

- 1) 岡田知子、後藤隆太郎ほか：玄界島の被災直後と復興事業後の空間変化 震災復興計画のあり方に関する研究、日本建築学会研究報告九州支部、pp.149-152、2010.3
- 2) 地井昭夫：漁村集落計画 漁村集落の特質と計画課題、新建築体系18 集落計画、1986.1
- 3) 富田宏：漁村と生業の再生、佐藤滋編、東日本大震災からの復興まちづくり、大月書店、2011.12
- 4) 重村力：集落再生と減災、佐藤滋編、東日本大震災からの復興まちづくり、大月書店、2011.12
- 5) 富田宏：今、あえて漁村計画論 ～漁村づくりの来し方と行く末について～、水産振興、No.511、2010.7
- 6) 日本建築学会農村計画委員会：漁村再生 2011年度建築学会大会農村計画部門研究懇談会資料、2011.8

注

- 注1) 第一種漁港または第二種漁港を背後に持つ漁村。漁港でおおよそ200、集落は400を超える。
- 注2) 福岡市による調査。建築学会九州支部による調査では全半壊は2割とされた。
- 注3) 岡田らは調査と同時に提案をおこなっていたが、一体的整備は覆らなかった。
- 注4) 重村らのグループは、大船渡市三陸町越喜来地区において、具体的な提案を行っている。成果は神奈川大学のウェブサイトで公開されている。
<http://www.arch.kanagawa-u.ac.jp/~shigemura/>
- 注5) 神戸大学山崎寿一教授からの教示による
- 注6) トルコ軍艦「エルトゥールル号」遭難の際に、救助活動に当たった村としても有名である